

## 内小野名について

安藤信郎

はじめに

豊後国来繩郷内に小野庄と内小野名とがある。「来繩郷内・小野庄」と「来繩郷・内小野名」とである。一見紛らわし名稱である。

来繩という地名は、応利山で森村、佐野村と接して、その西麓一帯に存在した近世村落名として残存した。明治期に合併を繰り返し、現在は豊後高田市の大字名として存在する。僅かに来繩郷を偲ぶことのできる地名である。来繩郷・内小野名の所在は来繩郷そのものの範囲を知る上でも興味がある。

## 一 宗安田地避状による内小野

内小野名に付いて、明確にその四至を示している文書が二通ある。文保元年（一一三二）の沙弥宗安田地避状（渡々一一三七）と天正十年（一五八二）の息雲による来繩郷内小野名坪付（渡々一二四八）である。勿論その間二百六十余年の隔たりはあるが内小野名を比定する上での有力な依拠である。

宗安田地避状に依れば、宗安の知行地、内小野村の増寿名の四至として東は前□□、南はやはら塚、西はうしろ山の尾

立、北はいしたう、以前の宇佐大道としてゐる。東は前にある大川であろうか。西は後背地の山、「連丘」の頂を結ぶ路である。この両者はよく境界に用いられる自然地形である。南のやはら塚は矢原との境で、内小野の背後の山が桂川に突き当たり断崖となつてゐるところにある。断崖には粘土層が抜け落ちて出来たような自然の洞穴が川面と並行に横に細長くえぐられていて、河辺の岩屋と呼ばれてゐる。

今、内野の堂に安置されてゐる通称焼け仏と呼ばれる仏像は高山寺焼亡の際、高山寺からこの岩屋に飛来したといわれている。総高一九三センチ、一木造、立像のこの御仏は、雄渾というか、堂々としてゐて、然も優美さを漂わせてゐる。両手を失ひ一切の裝飾をなくし、御顔にまで焼け跡を残した痛ましい御姿であるにも拘わらず、仏像の持つ要素とでもいうものを極端にまで捨象し尽くして表現してゐるのが、この御仏であろう。立ち去り難いものを感じさせる尊容である。

川辺岩屋の西の端に川を渡る沈み橋が架けられてゐて、現在も小田原と佐野の矢原との境である。北の四至としてゐる「いしとう、以前の宇佐大道」といわれる場所は、大字森の内山と大字小田原の下平を結ぶ山越えの道路に現在も、宇佐道の呼名が、又、この道路が小田原側の山腹を下る辺りに塔之御堂の名称が残されてゐる。

塔之御堂には、県指定有形文化財の弥陀三尊の種子を刻した鎌倉後期の造立とみられる板碑、市指定有形文化財の国東塔（塔身四面に舟形というより、むしろ蓮弁形の光背をもつ仏像を刻出し、その間の二つの面に「妙法蓮花経著諸仏出世之ノ戒壇衆生成仏之直道也仍ノ如法経該卷□□／為往生極楽乃至法界□□／利益平等奉如斯敬白□□沙弥□□」「改面」延慶「三」庚戌ノ大願主□□「の銘文が刻出されてゐる）、五輪塔の類が小堂の傍らに残存する。実はこの堂の下に現在舗装された道があるが、舗装道路と堂との間に古い道があり、土地の人々が宇佐道と呼んでゐるのはこの古い道のことである。

国東塔は近代、現在地に移されたものであり、以前は上の方に立てられていたという。国東塔の旧所在地を求めて堂の後ろの方に上ると、今一つの古い道がある。これはまた、堂々とした旧大道で、道の上の方に堂跡らしい場所さえある。

以上を総合すると、いしとうは石の塔、つまり国東塔のことであろう。以前の宇佐大道は一番上の旧道で、文保の頃にはす

でに中の旧道が宇佐道となっていたと考えられよう。

宗安避状にみえる内小野村増寿名の四至は、大略現在の内野に当たるといえよう。「うちのおのみよう」の漢字表現は「内小野」で、応永三十二年（一四二五）の某安堵状（渡119）には「内尾」が、文明十年（渡152）、文明十五年（渡161）の史料にも同一表記がみられる。

明治十五年の大分県各町村字小名取調書に小田原村「内野尾（下ノ平 向紺屋）」（角川地名大辞典・大分県）として表わされ、陸地測量部の五万分の一地図にも「内野尾」として表わされている。この内野尾は、現在は内野と言われている。このことから、この辺は中世の来繩郷であると云える。来繩の名称は近世の来繩村として応利山西麓一帯に残されたように、内小野の名称も内野として小田原の一部に残されたことも考えられる。豊後高田市の小田原地区にある内野のことである。

## 二 内野の景観

内野の存在する小田原地区は西叡山北麓に位置し、現在、迫田・原・上村・寺田・下ノ平・内野・清滝の七つの居住区から成り立っている。近世の小田原村は、隣接する佐野村、奥畑村、森村と共に島原藩田染組に属していた。明治八年、奥畑と佐野村は新しく佐野村を創るが、明治二十二年この佐野村と小田原村・森村がいっしょになって河内村をつくり、昭和二十六年の町村合併で高田町となり、昭和二十九年市政施行により豊後高田市となった。明治二十二年まで存続した小田原村の字名には上村（下紺屋）、原（向原、向屋敷）、迫田（峰、寺田）、内野尾（下の平、向紺屋）が存在する。

西叡山の北麓の尾根の一つが、北に接する丘陵地帯に嵌入していて、川は尾根に遮られて、一旦は北上し、丘陵地帯に遮られて再び南下する。この蛇行部の沖積層に広がる農耕地は、原や尾野の呼び名にふさわしい景観である。しかも、四方を山で囲まれているところは、まさに内の、尾野である。下の平には橋本一統が住んでいて藤原国倫を先祖とし、この地来繩郷小田原に住して来たという。（未完）

註・本文中に（渡？一三七）などあるのは、渡辺澄夫編著『豊後国荘園公領史料集成』（別府大学附属博物館刊）の第二巻園埼郡（一）の三七ページに所収の史料であることを、省略して表示したものである。

（豊後高田市文化財調査委員）

〔会告〕

# 大分県地方史

全4巻

## ●大分県地方史研究会編

『大分県地方史』は、昭和二十九年十月に本会の機関誌として創刊されたが、以来三十年間、多くの会員の熱心な活動に支えられて、今日に至っている。しかし、五〇号以前は入手することが困難となり、地元会員のみでなく全国の歴史研究者より復刊を望む声が強くなり、この度、国書刊行会（東京都）の協力を得て、創刊号から第二九・三〇合併号（昭和三十八年八月発行）までを全四巻にまとめて復刻することとなった。入手ご希望の方は、最寄りの書店に予約の上、お求め願いたい。セツト定価は二八、〇〇〇円、分売はおこなわない方針である。

大分県地方史研究会